

二〇二三年度

人權作品入選作文集

太宰府市教育委員会

- ・大事だいじないのち・・・・・・・・・・・・・・・・
- ・「しょうがい」って？・・・・・・・・
- ・家事かじ・・・・・・・・
- ・友ともだち・・・・・・・・
- ・不自由ふじゆうな人も過すごしやすく
- ・うあばい合あいと助たすけ合あい
- ・友達ともだちを大切たいせつにする気持きもち
- ・同性婚どうせいこんが認みとめられる世よの中なかへ
- ・叔母おばから学まなんだこと
- ・無意識むいしきな差別さべつ・・・・・・・・
- ・無自覚むじかくにしていた差別さべつ
- ・二択にたくなんてつまらない
- ・ジェンダー差別さべつのない社会しゃかいへ
- ・見た目みめと心こころ・・・・・・・・

小学校三年	田中	美羽	1
小学校四年	萩原	瑛冬	2
小学校四年	竹石	湊哉	4
小学校四年	加藤	賑	6
小学校六年	宮原	奏介	8
中学校一年	高橋	京平	9
中学校一年	藤井	爽楓	11
中学校一年	西依	穂々	13
中学校二年	中野	暁生	15
中学校二年	小川	真央	18
中学校二年	東原	花恋	20
中学校三年	古川	智彩	22
中学校三年	前田	彩葉	24
中学校三年	井口	和華	27

だいじ

大事なのち

しょうがつこうさんねん
小学校三年 田中 美羽

わたしは、ニュースで、ロシアとウクライナがせんそうをしていることを知りました。学校で平和学習もしました。

わたしは、せんそうをすることはよくないと思います。なぜよくないかというと、せんそうは、人の命をうばうからで

す。せんそうでなくなるのは、たたかっている人の命だけではありません。まだうまれたばかりの赤ちゃんや、おじい

ちゃん、おばあちゃんなど、たたかっていない人の命までなくなってしまう。命がなくなると、みんなかなしい

おも
思いをします。

いま、わたしは、家族でごはんを食べたり、休みの日におでかけをしたり、友だちと学校で遊んだり、元気にすごし

ています。でももし日本でせんそうが起これたら、家族や友だちと楽しくすごすことができなくなります。楽しくすご

すことができなくなるのは、わたしだけではなく、みんな、好きなことや、やりたいことをやることができなくなります。

それは、すごくいやです。好きなことをしているときは、え顔になります。でも、好きなことができなくなったら、みんな

なのえ顔もなくなっかなしい思いをしてしまいます。わたしは、みんながえ顔でいられる毎日になりたいです。

いま せいかつ
今の生活で、あたりまえだと思（おも）うことが、あたりまえにできることを感（かん）しやしてすごすことが大（たい）切（せつ）だと思（おも）います。
おいしいごはんが食（た）べられること、学（が）校（こう）で勉（べん）強（きやう）したり友（とも）だちと遊（あそ）んだりできること、家（か）族（ぞく）と毎（まい）日（にち）仲（な）よく元（げん）氣（き）にすごせること、おばあちゃんやおじいちゃんに会（あ）えること、今（いま）、わたしにあた（あ）りまゑにできていることにた（た）くさん感（かん）しやしながらすごしていきたいです。あた（あ）りまゑのことがあた（あ）りまゑにできるように、一（ひとり）人（ひとり）のこ（こ）を思（おも）つて行（こう）動（どう）し、みんながえ顔（がお）ですごせる世（せ）界（かい）にしてい（い）きたいと思（おも）います。世（せ）界（かい）中（ちゆう）で起（お）きてい（い）るあ（あ）らそ（そ）いが、少（すこ）しずつでもな（な）くな（な）ってほ（ほ）しいと思（おも）います。わたしは、せんそうをとめることはでき（き）ないけ（け）ど、友（とも）だちと仲（な）よくする（す）ことはでき（き）ます。友（とも）だちと仲（な）よくして、命（いのち）を大（だい）事（じ）にしたいです。

「しょうがい」って？

しょうがつこうよねん はぎはら えいと
小学（しょうがく）校（こう）四年（ねん） 萩（はぎ）原（はら） 瑛（えい）冬（とう）

ぼくは、道（どう）徳（とく）のじゅ業（ぎよう）で「車（くるま）いすのお（お）じさん」というお（お）話（わ）を讀（よ）みました。そのお（お）話（わ）は、ぼくとお（お）父（とう）さん（が）デパート（へ）お（お）も（も）ち（や）を（か）い（い）に（い）く（く）と中（ちゆう）で、車（くるま）いすのお（お）じさん（と）出（で）会（あ）い、お（お）じさん（を）トイ（と）レ（れ）に連（つ）れて行（い）くま（で）に（あ）つた出（で）来（き）事（こと）が書（か）かれていま（いま）した。

ぼくは、このお話のキーワードとなる「しようがい」ということについて考えました。車いすのおじさんを連れてお父さんとぼくはトイレに行くまでに、道路の段差や歩道にはみ出した自転車など、大変な場面にいっぱい出合います。また、やっとトイレに着いても、そこには車いす用のトイレがなかったのです。ぼくは、どうしてこの町ではこんなことが起こっているのかと不思議に思いました。その時クラスの友達が、

「この町は、車いすのおじさんみたいな人がいるのにたいおうできていない！」

と言っていて、ぼくはたしかにと思いました。先生はこのような道路の段差や、歩道にはみ出した自転車のことを「しようがい」と言っていました。今までぼくは、体のどこかが動かなくなったり、調子が悪くなったりすることを「しようがい」だと思っていました。しかし、じゅ業の中で段差がなかったり、歩道をスムーズに車いすで通れたりすればこまらないし、こまったことがなければ、みんな同じように生きていくことができると思った時、ぼくは、はつとしました。

この道德のじゅ業で、「しようがい」というのは、もしかしたらぼくたちが知らないうちにつくっていたんだなと気づきました。ぼくは、このことをきっかけに、毎日何かこまっている人がいないか気にするようになりました。みなさんもこまっている人がいたら進んで助けてほしいです。そして、みんなが安心して生きていける町や学校をつくっていききたいと思います。

家事 かじ

しょうがつこう よねん
小学校四年 竹石 たけいし
湊哉 そうや

ぼくは、これまで、お母さんかあが家事かじをやるのは当たり前あまえのことだと思っおもていました。お姉ちゃんねえも同じように思っおもていたと思っおもいます。

ある休日きゅうじつに、お母さんかあがお昼ひるに仕事しごとに行かなければいけなくなっいたことがありました。

ぼくは、お母さんかあに、

「家事かじやっておいて。」

と言いわれました。

最初さいしよは、家の事いえ ことは、お母さんかあが毎日まいにち、休日きゅうじつでも当然とうぜんのようにやっていたので、すぐおに終わおると思っおもていました。

しかし、いざやってみたら皿洗さらあらい、洗せんたく回まわし、洗せんたくほし、洗せんたくたたみに部屋へやそうじなどいろいろかじな家事かじがあっつ

て全まったく終おわりませんでした。

こんなたいへんに大変かじな家事かじを一人ひとりで毎日まいにちやるなんてとてもお母さんかあはすごいなと思っおもいました。

もたもたしているとお母さんかあが帰かえってきてしまいました。お母さんかあは一休みひとやすもせず、なんとまだ終わおっていないかった。家事かじを十分じゅうぶんほどで終わおわせたのです。ぼくはまた、お母さんかあはすごいと思おもいました。

その後ご、お母さんかあはすぐに

「つかれた。」

と言いって休やすみました。でも少すこし時間じかんがたつと洗せんたくを始はじめました。しかし、その時ときのぼくは、家事かじの大変たいへんさを分わかっていたので洗せんたくを手伝てつだいました。でも、あまりうまくできませんでした。それなのに、お母さんかあは、

「ありがとう。」

と言いってくれました。とてもうれしかったです。

その日ひからぼくは、時々ときどき、家事かじを手伝てつだうようになりました。お母さんかあは、ぼくが家事かじをすると、毎回まいかい「ありがとう。」

と言いってくれました。

だから、ぼくは、今いま、時間じかんがあつたら家事かじを手伝てつだいます。時々ときどきつかれてやめなくなる時ときもありますが、お母さんかあがいつも言いってくれている、「ありがとう」にはげまされて毎日まいにち家事かじをやっています。

友だち

しょうがつこう よねん
小学校四年 加藤 賑

ぜんきぜんはん なか
前期前半の中で、ぼくはなかがわしのしょうがつこうみずきにしょうがつこうてんにゆう
小学校から水城西小学校に転入した。あたらがっこう
新しい学校にはどんな友だちが
ちがいるんだろう、という期待と、友だちができるかな、という不安な気持ちがあつた。でも、どちらかというと、期待
する気持ちが強くワクワクしながら学校へ向かつた。

きょうしつ まえ き
そしてぼくは教室の前まで来た。ワクワクしていたはずなのに、急にきんちようしてきて、ぼくが教室に入つ
た時、シーンとして反応がなかったらどうしよう、と不安になつた。

きょうしつ はい
でも、教室に入るとみんなが、

「おはよう。」

「ようこそ。」

しゅ おお こえ
と、はく手とともに大きな声であいさつをしてくれた。その声で、きんちよう感はいっきにとけた。みんなは、
「好きな色や食べ物は何。」

「昼休みは何の遊びが好き。」

と、たくさんしつ問をしてくれた。ぼくはうれしくなって、スラスラとしつ問に答えた。

この転校初日、図工の学習があつた。学校で用意された材料は先生からもらったが、みんなはそれぞれ家からかざりにつける材料を持ってきていた。みんなはきれいなかざりをつけていて、楽しそうにしていた。ぼくは、かざりつける材料を何も持ってきていなかったもので、どうしていいかわからず、少し悲しくなった。すると、クラスの男の子が、

「かざりないと。かしてあげる。」

と言つて、自分の持ってきたかざりから、いくつかを選んで、ぼくにくれた。ぼくはとてもうれしくて心が温かくなつた。かざりをくれたこともそうだが、こまっているぼくに気づいて、声をかけてくれたことが、何よりうれしかった。今度もし友だちがこまっていたら、その子がしてくれたように、ぼくも声をかけてみようと思う。そして、ぼくが安心してのように、友だちにも安心感をあたえられるような人になろうと思う。

ぼくはこのクラスが大好きだ。

ふじゆう ひと す

不自由な人も過ごしやすく

しょうがつこうろくねん みやはら そうすけ
小学校六年 宮原 奏介

ぼくには、八才の弟がいます。弟は、ペルテス病という脚の病気で、そう具をつけて生活しています。一年生の終わりに病氣のことがわかりました。今もそう具をつけていて、買い物などの外出で車いすがない時は、自分で歩いていて、きつそうです。特に階段の上り下りをするのは、家の階段でもとても時間がかかって大変そうです。だから、ぼくはバリアフリーと言われている、だれもが過ごしやすいようになればいいなと思っています。

家族でよく行く大きなショッピングモールには、車いすやエレベーターがありますが、どんなお店にも置いてあるわけではないので、設備がない所では移動が大変です。階段のときはお父さんがおんぶしていますが、そう具が重くて大変だそうです。そう具を外さないといけない時もあります。最近、家族で外出した時のことですが、車いすを探しても結局見つからず、弟は自力で歩いてきてきつそうでした。だから、設備やバリアフリーの所を増やして、みんなが過ごしやすくなるいいなと思いました。自分が困っていないなくても、だれかが困っているのではないかと考えることは大切だと感じました。

くるま 車 いすを置いておく、エレベーターを設置するなどしたり、困ったことのアンケートを取ったりして、小さな所からでも改善していくことが大事だとぼくは考えています。さらに、病氣のことや、体の不自由な人たちのことを知っておくことで、よりよく対応できると思います。ぼくが思いつかないような他の対応の仕方、たくさんあると思います。自分だけで知っておくのではなく、他の人にも伝えてあげると、体が不自由な人に会ったときによりよい対応ができるかもしれません。

おとうと ぼくの弟 だけではなく、病氣の人、体が不自由な人は、世界にも日本にもいっぱいいます。自分も他の人も、だれもが過ごしやすくなるために、バリアフリーを増やすことは、とても大切だと考えています。

うばい合いと助け合い

ちゅうがつかういちねん 中学校一年
たかはし 高橋
きょうへい 京平

ぼく 僕が戦争について考えるようになったのは、小学校六年生の修学旅行のときからでした。修学旅行で平和の大切さを学び、ウクライナとロシアの戦争をみて「これが本当にあっているのか」と思ったのがきっかけでし

た。

僕は小学校のときから、席がえが好きでした。そして、中学校に入つて初めての席がえを目前にしていたところ、先生からこんな話がありました。「少しずつの不満」これは、だれかだけがいい思いをして行動するのではなく、いやな気持ちをもつ人が減るように、みんなが少しずつ不満をもち、平等にするという話です。これを聞いて僕は、「いやな気持ちになっていた人もいたんだな。」と思いました。そして、日本、世界でも、いい思いをしている人と、いやな気持ちになっている人がいるのではないか、不平等ではないのかと思いました。

今、世界ではうばい合う「戦争」が起つています。日本は昔、戦争によつてもものすごい被害を受け、多くの人の命がうばわれました。そのようなことが、もう二度とないように日本は新しく憲法をつくり、戦争はしないと決めました。しかし、あれだけひさんなことが起きてはまだ「戦い」というものがあります。この「戦い」というものをなくすためにも、ぼくたちは協力し合つて、「少しの不満」を大切にしていきたいと思いました。

そして、世界では干ばつや内戦などと戦い、頑張っている人たちがいます。うばい合つて、物やお金、人などをとつていくのではなく、みんなで少しずつ分けあつていくと国同士の仲が深まり、もし、国に何か大変なことが起つたら助け合うことができます。実際に日本も三月十一日に起つた東日本大震災のときに、日本以外の国の人々が、食べ物やば金をしてくれたり、外国からボランティアとして、復興の手伝いに来てくれました。しました。

このようなことから、僕は戦争をして、人や土地、お金などをうばうことは、互いの国の関係も悪くなるし、大勢の人を傷つけてしまうことだと分かりました。

今、起こっているロシアとウクライナの戦いも、もう少し話し合っていたり、分け合ったりしていたら、未来がかわっていたのではないかと思いました。これから、「戦争」というものをなくすためにも「少しずつの不満」を大切にしていきたいと思いました。

友達を大切にする気持ち

中学校一年 藤井 爽楓

私は、中学生になって毎日学校に行くことを頑張っています。それは、クラスの人々と一緒に勉強したり、部活をしたりしたいからです。

でも、小学校六年生の時、私はとても学校に行きたくない時期がありました。母にそのことを伝えると担任の先生に電話をしてくれました。担任の先生が、「何でも相談に乗るよ。」と言って話を聞いてくれました。

わたしはそこで先生に、体育の授業で嫌な気持ちになったことを話しました。グループで振り付けを考えるときに勇気を出して言った意見を無視されるように感じたことや、タブレットで立ち位置が書いている中に自分の名前がなかったことを伝えました。

先生に話す前は、自分が同じグループの人に何か嫌なことをしたのかもしれないということや自分には参加できる活動とできない活動があるから入れてもらえないのかもしれないのではという気持ちがあり、意見を言っているのかなと心配をしました。また、高学年になって先生に相談することは言いつけにならないかなとも考えました。

でも、先生はしっかりと話を聞いてくれたので安心しました。

次の日、友達が謝ってくれました。先生から話を聞いて私が嫌な気持ちになっていたことに気付いてくれたようです。謝ってくれた時、私はすぐに許しました。本当はすごく傷ついていたらけれど、先生が話を聞いてくれたり仲の良い友達が心配したりしてくれたからです。それから卒業までの話し合いやグループ別活動の時はいつも心配したけれど、卒業するころはだいぶ平気になってきました。

私は、このことを経験して自分には何があっても人を仲間はずれにしたり、悪口を言ったりしないとか心に決めました。嫌な事をされたり言われたりした人は、少しのことでも大きく傷つきます。それに傷ついた気持ちは、すぐにはもとに戻りません。だから傷つける前に気をつけなければならぬと思いました。

いま
今のクラスは、とても雰囲気はいいけれど時々先生に注意されることもあります。でも、男女仲良く誰とでも話
しやすいです。それに楽しいことだけではなく、みんなで注意し合ったり、協力したりできるクラスです。何かあ
ったら、相手を傷つけずに互いの気持ちを伝え合って、解決できるようにしたいです。

どうせいこん みと よ なか 同性婚が認められる世の中へ

ちゅうがつかういちねん
中学校一年 西依 穂々
にしより みお

「海外では同性婚が認められている国がある。」その言葉をSNSで見たとき私はとても驚きました。理由は結婚
は男女であることが当たり前だと思っていたからです。そして同時にどうして日本では認められていないのだろう、と
疑問を抱きました。

まず世界では、ヨーロッパ、南北アメリカ、オセアニアなど、三十四の国・地域で同性婚が可能になっています。
しかし、同性愛そのものが違法となる国もあります。実際アジアでも違法となり、処罰を受ける国があります。日本
は違法にはなりませんが同性婚は認められていません。アジアでは唯一台湾だけ同性婚が認められています。でも

なぜ同性で結婚してはいけない国が多いのでしょうか。私は同性愛を知ったとき、性別を問わず誰かを好きになれることはとても素敵だと思いました。また、異性を好きになることは否定的に思う人が少ないのに、どうして同性を好きになることを否定的に思う人が多いのだろうと思いました。同性愛に対し、否定的に思う人が多いことも同性で結婚してはいけない国が沢山ある理由の一つだとも思いました。私は同性愛を知ってから当たり前が変りました。人の恋愛は異性に対するものだけではなく同性に対するものもあると知りました。また、異性愛でも同性愛でも恋愛することは人の自由だし、どちらも素敵な恋愛だと感じました。

このことから私は、簡単なことではないと思うけれど、少しでも早く、少しでも多くの国の同性愛・同性婚が認められればいいなと思いました。私も同性愛のことを言いやすい環境をつくったり、否定せずに理解し相手が安心できるような声をかけたりと、自分ができることを少しずつ増やしていつて少しでも安心して過ごせるようにしていきたいです。同性愛が認められることが何年後、何十年後かは分からないけれど、いつか異性を好きになっても、同性を好きになっても否定されない世の中になっていてほしいです。

おばま

ちゅうがっこうにねん
中学校二年
なかの
中野
ひかり
暁生

僕の叔母は生まれつき耳が聞こえにくい難聴という障がいをもっています。

だから、おぼ はな叔母と話すときは、おお大きめの声で話したり、くち口をはつきり開けて何と言っているかくち うご口の動きで読みとって
もらったり、かみ か紙に書いてたりしています。

また、叔母は子どもの頃、耳が聞こえない人たちが通う学校にも行っていたので、きちんと言葉を発音することができます。今はもう、慣れもあつて叔母と話すことは大変なことだとは思っていません。

にねん まえ
二年ほどのことです。
おぼ おぼ
叔母と、僕と、叔母の母親である祖母と、
おぼ ははおや そぼ
三人でシヨツピングモールに行きました。
さんりん い

かいもの
買物をしてい
ると、たまに
おばあさんが

「か買ほんいたい本があるから本屋を見ほんやてくる。」

「何かスイーツを買いたいから買ってくる。」

い
ひとり
こうどう
とき
と言つて、一人で行動しようとしている時がありました。

祖母は店の外で待っていました。僕はその都度、叔母についていくことにしました。叔母は耳は聞こえなくても、見た目は普通の人と同じなので、店員さんが普通の人と同じように叔母と接したら困ることになるのではないかと思います。その頃はコロナ真ただ中で皆マスクをつけていたので叔母が店員さんの口の動きを読み取れないのではないかということなど、いろいろと心配だったからです。

叔母が本を買ったり、スイーツを買ったりする度に僕はがんばって叔母のサポートをしました。しかし、帰り際、叔母が僕にこう言いました。

「あのね。私が何か買う度に心配でついてきてくれる気持ちはありがたい。でもね、もう少し私を一人にしてほしいの。一人でゆっくり物を見て買いたい。ずっと横にいられると一人でゆっくり買い物ができないの。心配しなくても私は一人で買い物をする事ができるから、まるで何もできない人かのように接するのはやめてほしいな。」

僕はその言葉を受けたときにとっても驚きました。僕ががんばってしていたサポートは叔母からしたら嫌だったなんて。

しかし、確かに僕だつて一人で買い物をしたときに横にだれかがいると嫌です。叔母も、障がい者だから、耳が聞こえないからという理由で、過度な心配をされるのが嫌だったのです。

僕はこのとき初めて学びました。障がいがあるからといって過度な心配をするのは、かえって迷惑だということ。

ほんにん ほんにん まか しょう
本人ができることは、本人に任せてよいということ。障がいがあってもなるべく普通のひととおなじように接した方がよいということ。

いま おも かせ そぼ おば ひとり か もの
今、思い返せば祖母は、叔母が一人で買い物をしているとき、一度も叔母のサポートをすることはありませんでした。
そぼ おば ひとり おば ひとり
祖母は、叔母が一人でできること、叔母が一人でゆっくり買い物をしたいと思っっていることがわかった。
おも おも
そう思うと、ずっと叔母のサポートをして自己満足をしていた自分が恥ずかしくなりました。僕は叔母の気持ちなんかかんが かつて こうどう
考えずに勝手に行動してしまったことを後悔しました。

ぼく あらた しょう
僕は、改めてこれからの障がいのあるひととの接し方について考えました。

もちろん、 しょう
障がいのある人が困っているのならすぐに助けるべきだと思います。しかし、もしその障がいのあるひと こま
人が困っていないのなら、無理に助ける必要はないと思います。すると必要最低限のサポートでいい。なるべく本人が嫌な思いをしないような思いやりを持てば、それがきつと本当の優しさになるのではないのでしょうか。

もちろん、 ひと おも
人がどのように思っているのかを他人が知ることはできないので、障がいがある人が困っているのか困っていないのか判断することは難しいことです。しかし、 しょう
障がいのある人が困っているのか困っていないのか、その人の気持ちを深く考えることはそこまで難しいことではありません。障がいのあるひとと接するときは、本人の気持ちも ふか かんが
気持ちを深く考えたサポートをするのがいいという心を大切にしたいです。

無意識な差別

ちゅうがっこうにねん おがわ まお
中学校二年 小川 真央

みなさんは、「男だから・女だからこうあるべき。」などという言葉を言われたことは、ありますか。

私は、夏休みにあるCMの言葉を聞いて、男女に対しての決めつけが世の中に沢山あることに気が付きました。

そのCMは、ACジャパンの「聞こえてきた声」というCMです。このCMでは、色々な場面で発言された言葉が音声

なしの字幕で出てきます。例えば、「子供が熱を出したので、有休を取らせてください。」と会社で電話をしている場面

などです。私は、初めてこのCMを見たときに、この言葉を女の人が言っている場面を想像しました。そして、こ

のCMの最後に「聞こえてきたのは、男性の声ですか。女性の声ですか。」という言葉が表示されました。この言葉を

見て私は、はっとしました。無意識の内に、この言葉は、男の人・女の人があると言っていると言っているからで

す。もう一度このCMを見ると、どの場面にも男の人・女の人・女の人の描写はありませんでした。そのとき、決めつ

けているつもりはなくても「男だから・女だからこうあるべき」という考えが、まだ自分の中には沢山あるのだと

気付きました。

さいきん がっこう じゅぎょう じよせいもんだい たようせい まな きかい たくさん
最近、学校の授業で女性問題や多様性について学ぶ機会が沢山あります。その中で学んだことを生かして、

できるだけ差別や決めつけなどをなくそうと思うようになりました。それでも、無意識に決めつけてしまうことがあります。

す。しかし、それを言葉に出すか出さないかはこれまで学んだことで考えられると思います。

普段、私が生活している中で他にも男女平等ではない・この考え方はおかしいと思ったことがあります。例

えば、青のコップと赤のコップがあつて、それを配るときに「コップの配り方は男の子っぽい色、とかで決めて良い

よ。」と言われました。その時に、男の子っぽい色、と性別によつて使う色まで決めてしまうのはおかしいと思いま

した。好きな物や趣味・習い事などに、性別は関係ないと思います。私は、女の人・男の人という二つに区別

するのではなく、その人の意見を大切にしたいと思います。だから、人の好きな物などをバカにしたり、いじったりす

る人をなくしていかないといけないと思います。そして、一人一人が大切にされるようになってほしいです。一人一人

を大切にすることは、どんな場面でも大事なことでと思います。これからの世の中は、どんどん多様性を大切にして

いく時代になっていくと思います。その中で、男女という区別に関係なく「一人のひと」として個性や特技を認め合

い、それを発揮できる世の中になっていってほしいです。しかし、性別によつて得意なこと・苦手なこともあると思ひ

ます。また、例えば職業によつて男性の方が多い、女性の方が多いなどということがあります。しかし、それも、

その人の得意なことなどを生かしているだけだと思います。だから、そこで男性だから、女性だから〇〇には向いてい

ないなどと決めてしまうことは、良くないと思います。

世の中に男女差別や性別に対する決めつけは、まだ沢山あります。それをなくすためには、「二人のひと」としてその人と向き合い、認め合うことが大切です。そして、一人一人の個性や得意なことを尊重し、お互いを補い合い、助け合える世の中になっていってほしいです。

無自覚にしていた差別

中学校二年 東原 花恋

今年の六月に、あるアニメ映画が実写化された。アニメ映画のファン達は、完成をととても楽しみにしていた。しかし、原作通りの白い肌にさらさらした赤髪ではなく、褐色の肌にドレッドヘアの女性が主人公だった。このことを知って、多くの人が「ポリコレを意識しすぎ」などと意見していた。私は、「ポリコレって何だろう?」と思い、言葉の意味と、この映画について調べてみると、ポリティカルコネクトネスとは、人種や宗教、性別などについて寛容であろうとする考え方のことを示し、『ポリコレ』と略されるということが分かった。

今回の実写化では、もともとのキャラクターのデザインと大きく違ったことから、「ポリコレを意識しすぎている」

などの意見が出たが、映画の監督は主人公を演じる女優の雰囲気は原作のイメージとぴったりだったからその女優

を起用したそう。ならば実写映画で主人公を見てポリコレが頭に浮かんた人は、自然と人種差別をしたのではな

いかと思った。私も初めて見たとき、「人種差別を変に意識しないでほしかったな」と思った。しかし、ポリコレに

ついて調べてみて、直接差別になるような言葉を言わなくても、差別をしてしまう心が存在していることに気づい

たし、このような考え方は主人公を演じた女優にも失礼だと思った。私は差別をなくしていくために、人種な

どの違いをお互いに受け入れ、認め合うことが大切だと考える。例えば、「私たちはクッキーが好きだけど、あ

の子はグミが好き」ということを知っても、それで差別しようとはならないはずだ。同じように「私たちは日本人だけど、

あなたたちはアメリカ人」、「私は東京都出身で、あなたは和歌山県出身」などの違いは受け入れて認め合っ

接することが大事だと思う。私が差別について考えるきっかけになったこの映画も、「主人公の女優がどこの

出身なのか」ではなく、「主人公の女優のどのようなところが原作のキャラクターのイメージと合うのだろう」とい

うところに注目して見てみたいし、多くの人にそのような考え方をもってほしい。この映画について調べることを

通して、最初はあまり興味がなかったけれど、見てみたくなってきた。夏休みの間にこの映画を見に行つて、演じ

ている俳優たちやアニメとは違った実写映画の良さを見つけて楽しみたいと思う。そして、その良さを周りの人たち

に伝えて、人種など色々なことに關する差別をなくすためにできることをもつと考えていきたいと思つた。

にたく

二択なんてつまらない

ちゅうがっこうさんねん
中学校三年
ふるかわ
古川
ちさ
智彩

世界中の人々はすぐ二つのものに区別したがる。真面目、不真面目や普通、特別などが例として挙げられる。その中でも私は、陽キヤ、陰キヤという区別が大嫌いだ。確かに、明るい性格の持ち主で、友達とたくさん話したいタイプの人間もいれば、おとなしい性格の持ち主で、一人で自分のしたいことをするタイプの人間もいる。はたまた、大勢で楽しむことは好きだが、自分の時間を大切にしたいタイプの人間もいる。しかし、このようにたくさんあるタイプのことを陽キヤ、陰キヤという言葉で二つに区別することに、私は違和感を持つてしまう。

たまに、人のことを陽キヤ、陰キヤで区別している人間がいる。実際に人のことを「陰キヤのくせに」なんて言葉で陰口を言つて、嘲笑っているのを聞いたことがある。それを聞いて、私は同意も否定もすることなく、ただただ愛想笑いを浮かべることしかできなかった。本当は、そうやって人のことを区別することは良くないことだと言いたい。

だが、言えない。情けないことだと思いが、それを言うことで私も裏で「陰キヤのくせに」と人に言われてしまうのではないかと考えてしまう。言葉には、一人の人間の生き方を大きく変えてしまうような、そんな力があると思う。

私は、小さな区別や発言が大きな差別になっているのだと思う。物事はなんでも小さなことから始まっている。喧嘩だってそうだ。最初は線香花火のように小さな不満から始まるが、いつか打ち上げ花火くらい大きな爆発が起る。陽キヤと陰キヤの区別も最初は軽いノリで始まったのかもしれないが、もしかすると大きなじめや差別につながってしまうかもしれない。実際にこの言葉に苦しむ人は大勢いると思う。

そもそも陽キヤと陰キヤで区別する必要があるのだろうか。漢字を見てみると、明らかに人間に対して使っている言葉ではないことが分かる。いわゆる差別用語だ。そして、あくまで個人的な意見だが、人間に「陰」なんて分類をされる人はいないと思う。もし、そういう分類をされてしまう人がいるのなら、他人から見ると比較のおとなしい人が多いのかもしれない。だが、その人がおとなしい人であったとしても、正直他人には関係ないことだと思ひ、勝手に陽キヤ、陰キヤというレッテルを貼られることはお門違いだ。絶対にあつてはならないことだと思う。

私は、今生きている人が幸せに楽しく暮らしているのであれば、陽キヤ、陰キヤなんて区別はいらないと思う。そもそも陽キヤ、陰キヤなんて関係なく、人間は人間だ。そんな区別にとらわれるようじゃ、どんなに楽しいことをしても本気で楽しめないだろう。自分のしたいことをすればいいと思うし、他人の評価や勝手なレッテルを気にせずに

胸を張って生きていけば、思ったよりもいい人生が送れるかもしれない。先ほども書いた通り、言葉には一人の人間の生き方を大きく変えてしまうくらいの影響があると思う。だからこそ、ひとつひとつの発言に最大限の注意を払い、世界にはびこった区別や差別、理不尽を無くすという思いを持つことが大切だと私は思う。

ジェンダー差別のない社会へ

ちゅうがっこうさんねん まえだ いろは
中学校三年 前田 彩葉

「人権」とは、私たちが幸せに生きるための権利である。これは人種や民族、性別を超えて万人に共通した一人ひとりに備わっている。そんな人権の中で、私は今回「ジェンダー問題」について書いた。ジェンダーとは、生まれ持った生物学的性別によって規定する概念のことだ。例えば「家事は女性の役割、仕事は男性の役割」などである。最近では、この概念にとらわれない「ジェンダーレス」という言葉も知られてきている。私は過去に同性愛者の友達に出会ったことがある。当時小学六年生だった私は、教室でAちゃんとBちゃんの会話が耳にはいつてきた。「Aちゃんって好きな人いるの？」とBちゃんが黄色い声で質問している。「うん、いるよ」と答えるAちゃん

ん。すかさずBちゃんは「そうなんだ！彼氏とデートとか行ってみたいよね」と言った。その瞬間、Aちゃんの顔はあまぐも雨雲がかかったように暗くなった。私は違和感を覚えた。しかし、あまり気にしないことにした。その日の夜、SNSを見ていると「ジェンダーレス」という文字が目に入った。調べてみて、その時初めて意味を知った。ジェンダーレスの中には同性愛も含まれるらしい。もしかするとAちゃんは…と思い、後日話を聞いてみようと思った。だが、あるサイトに「他人にカミングアウトしたくない人もいる」と書いてあった。Aちゃんは嫌だろうか、と考えたが、何か力になれたらいいなと思って決意は変わらなかった。翌日、Aちゃんに話しかけた。「ねえねえ、Aちゃんは女の子が好きなの？」するとAちゃんは少し驚いた顔をして「実はそうなんだ」と言った。「そっか。私は変なことだと思わないよ」と私が言うと、「本当？みんなが知ったらどう思われるか不安だったの。話聞いてくれて嬉しかった」とAちゃん。それを聞いて私の心も晴れた。この出来事をきっかけにジェンダーレスを知った。自分の周りにそんな子はいないかと思っている人がほとんどだろう。しかし視野を広げてみると、気づくことがあるのだ。わたしはそう学んだ。Bちゃんの「彼氏」という表現は、Aちゃんの異性愛を前提にしてしまっている。これはAちゃんにとって重荷だったかもしれない。この場合は「彼氏」ではなく「恋人」と表現した方が良かっただろう。言葉遣いにも気を付けないといけないなと思った。同性愛の他に、すべての性別の人に対する性的、恋愛指向を意味するバイセクシヤルなどもある。このような知識があるかないかでも変わってくると思う。同性愛を知らなければ、その当の本人に

よそ 寄り添うことはできない。その他も同様だ。だからまずは「知ろうとする姿勢」を一人ひとりがもつべきだ。そして、美化
さべつ ひと することも差別の一つになりかねない。「同性愛なんて素敵！」などの行き過ぎた優しさや気遣いが、彼らに「自分は
たにん ちが かんじよう あた 他人とは違うんだ」という感情を与えてしまうかもしれない。それぞれがもつ「自分の色」に対して差別も美化も必要
ない。この世界に「普通」なんてないし、つくってはいけないと思う。最近では、ジェンダーレスの芸能人が誹謗中 傷
お こ みずか いのち た で追い込まれ、自ら命を絶ってしまった事例もある。たくさんの方が本人に届きやすいネット社会である。だから、
ひとり はつげん せきにん 一人ひとりが発言に責任をもたなければならない。言葉は素晴らしいが、時に危険な刃物になってしまう。私たちの
ふつう お ほんにん いろ け 普通を押しつけ、本人の「色」を消してはいけない。私たちは「多様性」と同じ地球に生きている。だからこそ、互
ちが りかい みと あ いの 違いを理解し、認め合って、尊重する姿勢を大切にしていくべきなのだ。それを未来につなげていけば、もっと
あたた せかい か 温かい世界に変わってゆくだろう。社会を変えるのは私たち人間しかないのだ。あなたのちよつとした気遣いや
おも さべつ しゃかい 思いやりがジェンダー差別のない社会をつくるための一歩になると思う。ジェンダーだけでなく、いろんな社会問題
いちどみ なお について、ぜひもう一度見詰め直していきませんか。

見た目と心

ちゅうがつこうさんねん
中学校三年 井口 和華

ひと みた め はんだん
人を見た目で判断してはいけない。たしかに見た目は大事だ。例えば、せいけつかん
清潔感がある人なら第一印象は良く、
ぎやく せいけつかん
逆に清潔感がない人なら第一印象は悪くなるだろう。ただ、これは単なる見た目にすぎない。せいけつかん
清潔感がある、
ゆうしゆう
だからきつと優秀であることに違いない。これは偏見である。この偏見によって苦しむ人々が多いのではないか。
いま わたし ひつよう
今の私たちにとって必要なのは見た目を見るのではなく、心を見ることがだと思う。私はこの夏、このことを深く
まな
学んだ。

わたし ことし なつやす
私は今年の夏休みに三週間、イギリスのとある学校で行われたサマースクールに参加した。たくさんの国か
らいろいろな人が集まっていてとてもワクワクしていた。寮が振り分けられ、私は現地で友達になった日本人と
いっしょ へや む
一緒に部屋へ向かった。するといきなりすれ違ふ外国人から「ハロー」と言われた。海外では初対面でも挨拶する
のは当たり前なんだと思った。それから私はすれ違ふ全ての人に「ハロー」と言った。みんな笑顔で「ハロー」と言
かえ
い返してくれた。とても嬉しかった。遠くから二人の外国人が歩いてきた。よし、今回も挨拶しようと思い、笑顔
うれ
で迎えてくれた。とても嬉しかった。遠くから二人の外国人が歩いてきた。よし、今回も挨拶しようと思い、笑顔

で「ハロー」と言ったら睨まれ、無視された。とても怖かったその二人はセルビア人だった。セルビア人は日本のおもを良く思っていないんだろうなと思った。嫌われているのであれば、私も無理に話す必要はないと思った。

それから数日が過ぎ、グループ活動で私はセルビア人と話す機会があった。最初はちょっと怖くて避け気味だった。でもよく話してみると、とてもおもしろくて優しい人だった。その人は日本人を好きだと言ってくれた。私はすごい偏見をもっていました。海外には様々な人がいる。それなのにたった少しの出来事でその国全体の人を決めつけてしまった。差別してしまったのだ。私はとても罪悪感を覚えた。

その日以来、私とセルビア人のその子はよく話すようになった。日本人の中でも良いセルビア人として話題になった。しかし、初日に挨拶したセルビア人はずっと日本人を毛嫌いしていた。睨むのは日常のこと、わざと押したり大声で悪口を言ったりする。なぜ私たちがそこまで言われなければならないのだろう。国が違うだけで同じ人間だ。悔しかった。何もしていないのにここまでされる訳が分からなかった。そんな時、寮の先生からこんな話があった。「私たちはあなたたちが話す言語は分からない。でも悪口を言っているのは分かる。髪の色、目の色、肌の色、出身国なんて関係ない。残りの期間、みんなで楽しんで。」

と。先生がどういう経緯で言ったのかは分からないが、次の日から差別を受けることはなくなった。

よく考えてみれば私たちは日本人も良いセルビア人と悪いセルビア人とで差別してしまっていた。ちゃんと全員

と話^{はな}してもいなければ、目^めもちゃんと合^あわせたことがない。その人^{ひと}たちの心^{こころ}ではなく、見^みた目^めで判^{はん}断^{だん}してしまっ
た。今^{こん}回^{かい}は海^{かい}外^{がい}のことだ^{にほんこくない}ったが、これは日本^{にほん}国内^{こくない}でもありがちなことだ^{おも}と思う。見^みた目^めで人^{ひと}を判^{はん}断^{だん}し、勝^{かつ}手^てな偏^{へん}見^{けん}
で人^{ひと}を傷^{きず}付^つける、そんなこと^よが世^よの中^{なか}にあ^{ひと}つてはダ^だメだ。人^{ひと}は誰^{だれ}もが心^{こころ}を持^もち、み^ちんな違^{ちが}う見^みた目^めを持^もつ。それ^{わす}を忘^{わす}
れずに尊^{そん}重^{ちよう}していくのが大^{だい}事^じではない^{だいじ}だろうか。